

21世紀の アーティストよ、 吟遊詩人たれ

つばき のぼる
梶 昇
現代美術家

つばき のぼる ●コンテンポラリー・アーティスト。
「横浜トリエンナーレ2001」で哲学者の室井尚と
「インセクト・ワールド、飛蝗（バッタ）」を出品、
2003年「国連少年」展（水戸芸術館）、04年第11
回バングラデシュ・アジア・ビエンナーレ（ダッカ）、
05年「壁-占領下の物語II」アルカサバシアター
（パレスチナ）舞台美術担当、「リトルボーイ」（ニュ
ーヨーク）など国内外で展覧会多数



ユンヘンの「ロトリンガー」13

現代美術館」でロボットを展
示したあと、アーティストの

石渡誠君と二人でSバーンに乗ってラ
イプツイヒまで足を伸ばした。片道5
時間かかるところを雷雨の遅れなども
あり7時間30分を要してしまふ。

一人旅だったら退屈だろうなと思
いながら、条件反射のようにボーダフォ

ンに手を伸ばす自分に違和感を覚えて
しまふ。ヨーロッパを鉄道で旅すると
いうエレガントな振る舞いが、いつの
まにか車窓に流れる景色を物憂げにな
がめるビジネス客になっていることに
ドキリとする。もし恋人を待たせてい
るのなら、駅員に必死に列車の遅れを
聞いたり、やきもきする心のざわめき
が二人の感情を高揚させて、より深い
記憶をつくりあげるはずなのに……。

記録映像を撮影することに追われ、
編集はおろか再生する時間も与えられ
ず、無限に追いかけてられているうちに
人生が終わる。旅ですら意識して形を
与えなければ流れ去ってしまう……。

10:00 p.m.

ライプツイヒ駅

そんな感傷的な気分と裏腹に「新幹
線なら、トウキョウ・オオサカ往復でき
たよね〜」などと無粋な会話をしなが
ら、ライプツイヒの駅に降り立った。広
大な天蓋につつまれて、ざわざわと無
数の人々がうごめいているのが見える。
もう午後10時を過ぎているのに煌々と
灯る明かりの彼方から大音量のロック。

旧東ドイツ圏のもの悲しい風景に現わ
れた光の神殿のような駅舎にとまどい
を覚えながら、満面の笑みで僕たちに
抱きついてきたフランクと再会を喜ぶ。
早口にまくしたてるドイツ訛りの英語
を聞きながら、石渡君と僕の視覚はし
やれたシヨップデザインと垢抜けた若
者たちの服装に釘付けになった。

社会のインフラが充実し、基本生活
のクオリティが日本とは比べものにな
らないほど豊かなミュンヘンだったが、
生活の気楽さから来るセンスの悪さ、
ビジュアルへのこだわりのなさは際立
っていた。男子の正装は半ズボンにゴ
ムぞうり、安物の自転車にリュックサ
ック。女性の正装は明らかに色彩感覚
を疑うような原色のトップスとボトム
の組み合わせ。ドン小西がロケハンに
来てもすぐに逃げだしかねないとい
うドイツへの偏見が、この光景を前に
一気に消え去った。

「いいよね〜、ライプツイヒ」「やつ
ぱベルリンに近いからっしょ」

だらしなくヘラヘラ笑いながら、ま
たもや意味の希薄な会話を交わす僕た
ち。少しだけウインドウショッピング

という下心を見抜いたかのように「Go go」とフランクの声が響く。

11:00 p.m.

紡績工場 Halle14:

電車の遅れを恨めしく思いながら、キラキラと輝くライプツィヒ駅をあとに市街地の外れにある古い紡績工場へと向かう。午後11時を過ぎて、あたりは墨を流したような闇に包まれている。ほどなくして、人っ子ひとりいない街路を走るルノーのヘッドライトに巨大な赤レンガの塊が浮かび上がってきた。これが決して安くはない僕たちの交通費を負担しても彼が見せたかった「Halle14」に違いなかった。真夜中のライプツィヒ、廃墟の一角を占める5階建てのビル、階段を6階まで上るとやっと屋上に出た。

不思議な光景だった、フランクのガールフレンドでフィンランド人のアーティストがつくったインスタレーションが一面の草原のなかに静かに光っていた。水道や配管や電話線などのライプラインをスケルトンで抽出した、やや懐かしさを感じるコンセプトチュアルな作品。ビル屋上の奇妙な草いきれと遠雷のように遠く輝く駅舎、ナチが連

合車の空襲を避けるために屋上に草原をつくったという噂、自然に風が土を運んでできたという噂。どちらでもいいような不思議な時間。下を見下ろすと復元された大時計が鈍く光っていた。

いまヨーロッパでは古い工場や倉庫といった近代産業遺産を再生する計画が目白押しだ。この紡績工場跡の再生を指導するフランクもその有能なリーダーたちの一人なのだ。日本にリサーチに来たときはその片鱗も感じさせなかった彼が、この壮大な宮殿のなかでは幻の王のようにゆらゆらと見える。いつ着くともわからぬ遠来の客を、深夜まで全室に電灯を入れて待ち、なけなしの私費を投じて電気工事やパーティションの設営をした彼。

場の持つ歴史的スケールと、ヨーロッパの人々が見せる壮絶なまでのアートへの情念が増幅し、僕を圧倒する。人類の到達した「芸術」という精神活動への深い眼差しと敬意をかたくななまでに守る彼らの情熱はどこから来るのだろう。なかば諦めとも開き直りとも思える所作で、インモラルなジパンクを商品として輸出する我々に、良くも悪しくも決定的に欠けている何かがそこにあった。

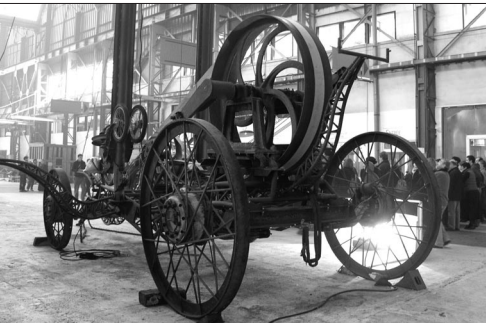
たった二人のための贅沢なもてなしを受けたのち、僕たちはベンジャミン・ベルクマンの巨大なインスタレーションに見送られて、雨のアウトバーンをワイマールへと向かった。

04:00 a.m.

ワイマールACCCギャラリー

激しく往復するワイパーをぼんやり見つめながら、「偶然は存在しない」と誰かが言っていたことを思う。何年も前から、誘われるように「廃」と名のつく場所に入入りしていたことは必然だったのかもしれない。

「ひととロボット展——夢から現実へ」（2003年、パリ日本文化会館）の設営時間を割いてヤノベケンジさんに行ったフランス・ナントの工場。長蛇の



フランスのナント市の工場跡で開かれた展覧会。ピアノを投げるための装置や巨大なシンバルなど、地元の劇団の舞台やパレードに用いられた奇妙な機械が並んだ
撮影：筆者（以下も同じ）



ワイマール郊外にあるブッヘンバルト強制収容所。「何者も外へ出ることはいできない」と刻印されている

列を耐えて見たピアノ投げのパフォーマンス。ジュール・ベルヌの生誕地でもあるナントは、今やヨーロッパ有数のアートで都市を再生したモデルケースになっている。日本人初のキュレーターとして三木あき子さんが企画を担当するパレ・ド・トゥキョウ。そして頓挫したとはいえニュー・ブランシュで使うことになっていた古いオペレッタハウスのラ・ゲテ。知性を失ったグローバリスム資本にはハンドリング不可能な「廃」という王冠を戴く死せる王たちだ。

レストランをスタンブラリーの対象としてしか捉えない雑誌読者の餌食となつて3年で夢果てる若きシェフ。安全や管理という言葉におびえて、美しくも悲しい建築を次々に破壊する雇われ社長と行政の人たち。「資本主義経済」という極めて多様性を失ったシステムでしか価値を判断できなくなった我々には、ヨーロッパの底力を身体化することなど不可能に近い。

いくらナント市からボナン氏（注：ジャン・ルイ・ボナンナント市文化局長）を呼んでも、視察に出かけても、イメージの必然性と確信のない人々にそれは薄汚れたボロをまとった老人にし

か映らないだろう。たとえそれがキリストであったとしても……。

4時、もう朝になるころ、車はワイマールのACCギャラリーに着いた。不思議に意識が覚醒して眠気はない。ビールで乾杯したのち、古いホテルを改装した迷路のようなスペースで濃密な展示を見る。「月だつて独立なんかしていない」という不思議な名前のグループ展がここで始まったのは1年前だったろうか。そのときは作品を送るだけになつてしまつたが、やはり現地

の空気は違う。
ニーチェやリストが、そして初期のバウハウスに集まつたクレイやカンディンスキーが呼吸した同じ朝霧のなかにいると想うだけでも鳥肌が立つ。露を含んだ野草を踏みながらゲートの奥さんが持つていたという廃屋を眺めていると、フランクがその家をいざれ購入して修復すると言いつつ。そのときはまた来るよと固く長い握手をする。

05:00 am

ブッヘンバルト強制収容所

夜明けのワイマールを疾走するクレイジーなツアーガイドに感謝しつつ、最後はブッヘンバルトの強制収容所に

立ち寄つた。5時なのにドアは開いていた。何者も外へ出ることはいできないと刻印された門扉を僕たちはいとも簡単に出入りする。モニュメントが人の体温に保持されているはずなのに冷たいと、真剣な眼差しで僕に何度も言う彼の目に、ドイツの戦後教育の厚みを感じて恥ずかしかつた。荒涼とした丘陵に、映画『戦場のピアニスト』のシーンが浮かんだ。そしてそれしか浮かばない、それが僕の戦後なのだ……。

こうして奇妙な一夜は明けた。ガールフレンドに気を遣いながらフランクのアパートでシャワーを借りる。黒バンのかけらにチーズを乗せて7時過ぎ、イエナ・バラダイスという駅に立つ。もらったTシャツを着込んで三人でセルフタイムに収まつたあと、僕たちは順調にミュンヘン東駅に到着。

すぐにチェックアウトして通訳の岡本さんと市街地で最後の食事。カイザーシユマーネという焼き菓子をたらふく食べて空港へ向かつた。

フランスにいるガールフレンドに会う石渡君と大阪に戻る僕を、ヘルツォーク&ド・ムーロン設計のサッカースタジアムが見送ってくれる。ワールドカップは見なくてもいいが、20ユーロ



↓お揃いのTシャツを着て、イエナ・バラダイス駅のホームに立つ石渡誠氏、フランク・モッツ氏、筆者（左から）

の建築内覧ツアーには参加しなかった。空港やスタジアムは、たとえ新しくても空虚さゆえのフラジリティがあり、どこか廃墟と通じ合うもの悲しさを感じる。エコノミーシートをひたすら空に並べようとする高層ビルの醜態ぶりとか、どこか違うと思うのは僕だけだろうか……。

某日正午
有馬温泉の自宅にて

そうだ、僕は日本社会がアートを発展させる秘訣について書いている。それなのに旅行記なんか書いて、なんて奴だと思われるかもしれない。しかし、日本人が国際人になろうとしても、日本人であるがゆえに尊敬もされ、また疎外もされるという事実からは逃れられないように、僕もパレスチナに行ってもバングラデシュに行っても日本人のアーティストであることからは逃れられない。そしてアーティストでいる自分に心底感激し、どこへ行っても心の底から信頼しあえる友人と会えることに感謝する。

近代は美術館とコマーシャルギャラリーというシステムを開発したが、21世紀は商業ベースとは一線を画し、吟遊



詩人のように創造現場をめぐって歩くアーティストも育成中である。システムと拮抗できるだけの力を備えた強力なアーティストが徐々に誕生しつつある。そして行政にも変化の兆しがある。

日本に戻ると数日で、いままで撮りためた近代遺産関係の映像を日本と欧米にわけて編集した。某アートプロジ

エクトで偶然、知己を得たT市の市長さんへ参考資料としてプレゼントするためだ。「ホテルに1個しかシャワーがないけど、ヨーロッパの廃墟見に来ますか？」という貧乏視察の提案をする僕に、市議会の議長も目を輝かせてついて来ると言う。現実はその簡単ではないとしても、何かのきっかけで彼らが動くときが来るかもしれないという予感はある。ヴェネチア詣でという鹿鳴館がすべてではないのだ。金銭や名誉で繋がることのない楽園のような人間関係こそ、アーティストが提案する最高の贈り物だということを思い出して欲しい。強力なアーティストはどんな時代においてもシステムに対抗できる。アートの部分になるのではなく、アートというシステムを駆使用するヨードのような乞食僧が、アートを「経済という貧困」から救い出すに違いない。それは『スターウォーズ エピソード3 シスの復讐』よりも現実的であり、科学的なできごとになるだろう。